

保育者養成課程における共感性育成プログラムの検討(2) —自己分析に基づく対応策の自由記述から—

○木野和代(宮城学院女子大学)

内田千春(東洋大学)

キーワード: 多次元共感性, レジリエンス, メンタルヘルス

問題と目的

保育者養成課程では、子どもや保護者と関わる上で、受容的共感的態度が重要であると説かれている。しかし支援対象がますます多様化するなど、支援者である保育者側に余裕のない状況が生まれている。こうした中、支援対象に共感しようとしすぎることがメンタルヘル스에悪影響を及ぼし、早期離職を促すことが懸念される。

そこで筆者らは、保育者における共感性と共感疲労の関連から保育者のメンタルヘルスの問題を検討した結果(木野・内田, 2017, 他)に基づき、共感疲労に陥らない健康な共感的態度について考えるプログラム(自己分析と事例検討)を作成・実践した(内田・木野, 2020)。本研究ではこの実践結果から、メンタルヘルス維持・向上に資する自己分析プログラム改善の可能性を検討する。

方法

プログラム参加者 保育士・幼稚園教諭養成課程の大学4年生(「教職実践演習」受講)90名, 小学校・幼稚園教諭養成課程の大学3年生(「幼児理解」受講)25名。このうち分析対象は、研究協力に同意し、毎回の宿題提出を含めた全活動に参加した56名(男4, 女52), 17名(男5, 女12)。

プログラム実施方法 5つの授業用に組まれた25名以下のグループごとに、3回の授業時間内に実施した。授業時間の前半平均50分に共感性プログラムを、後半にプログラムで用いた事例に関連するテーマを扱った小講義を行った。

プログラムの概要 「第1回」共感性の多次元的理解(自己分析・解説; 木野・鈴木, 2016), 事例検討1, 宿題。「第2回」共感疲労(自己分析・解説; 今・菊池, 2007より), 事例検討2, 宿題。「第3回」レジリエンス(自己分析・解説; 森他, 2002より), 事例検討3, 宿題。

分析データ (a) 第3回宿題(「レジリエンスについての自分の結果を振り返ろう。この時、第1回・第2回で回答した、共感性、共感疲労傾向を含めて、自分の状態を分析し、今後補強すべきレジリエンスの側面を考えてみましょう」と指示)での自由記述内容。(b) 第1回自己分析で用いたMES-SFの5下位尺度得点。これを用いてクラスター分析を行い、他者指向性低群(加えて自己指向的反応・被影響性が平均より高い傾向; 38名)と高群(逆の傾向; 35名)の2群に回答者を分類。

結果と考察

73名の自由記述内容をTable 1に示す分類カテゴリに分類した。指示通りに回答しているもの(分類①)は、34.2%であった。

一方、共感傾向とレジリエンスに触れながらも、両者の関連が不明瞭の回答(分類②)は24.7%であった。したがって参加者の約1/4は自らの共感傾向を意識化しているものの、共感傾向を補うためのものとしてレジリエンスの補強を捉えていないことが考えられた。しかし、これらについてさらに共感性の類型との関連を検討したところ、分類①では他者指向性低群16名・高群9名、分類②では5名・13名と偏りが見られた($\chi^2_{(1)}=4.14, p<.05$)。分類①では、メンタルヘルス維持が懸念される他者指向性低群が多いが、分類②では少ないことがわかる。したがって分類②の回答者は、共感傾向に意識は向けても、課題が少ないことからレジリエンスによる補強策を検討する必要がなかった可能性がある。また、概念理解等に誤解のあった者(分類⑨)が1割以上見られたことも課題である。知識の定着を図るためには、両者の関連を意識化する課題の工夫が考えられる。

Table 1 第3回宿題に対する自由記述内容の分類結果

分類	人数	%
① 共感性・共感疲労の結果を踏まえてレジリエンスの補強を検討	25	34.2%
② 共感性・共感疲労に言及し、レジリエンスの補強を検討しているが、両者の関連は不明	18	24.7%
③ 共感性・共感疲労に言及せず、レジリエンスの補強のみを検討	5	6.8%
④ レジリエンス補強以外のスキルアップに言及	2	2.7%
⑤ レジリエンス補強対策の言及なし	2	2.7%
⑥ レジリエンスに問題なしと認知	6	8.2%
⑦ 共感疲労の心配はない	1	1.4%
⑧ 保育者適性のなさの自覚のみ	1	1.4%
⑨ 誤解	10	13.7%
⑩ 解説困難	3	4.1%
合計	73	100%

分類①～③に記された対応策は、レジリエンス4下位側面のうち低い側面を高めるというものが大半を占めた(36名, 75.0%)。36名中、具体的補強策を自発的に述べた者は約3割であった。課題指示が補強すべきレジリエンスの側面を考えることであったためと思われる。今後、さらに踏み込んで、対策を考えさせるようなプログラム修正・追加・細分化等を検討する必要が考えられる。